宇野浩二全集

第二卷

宇野浩二全集

第二卷

宇野浩二全集　第二卷
定價一五〇〇圓
昭和四十七年五月十日印刷
昭和四十七年五月二十日發行
著者　宇野浩二
發行者　山越豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四
©一九七二　檢印廢止

宇野浩二全集　第二卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

戀愛合戰　七
化物　二六六
若い日の事　二八六
高い山から　三一八
甘き世の話　四一〇
あとがき　四五五

小說　二

戀愛合戰

第一編

一

法科大學生の大下千吉郎は、暑中休暇が來ても暑中休暇前と同じく、下宿の一間で毎日ごろ〳〵と寢たり起きたりしてゐた。寢たり起きたりと言つても、それは彼に聞くと、やれ頭が悪いのだとか、鼻が悪いのだとか、何でも何處か身體に故障があるのだ等と言譯をするが、なアに一口に言へばそれは怠け癖で、病氣と言へば彼が高等學校に入つて以來のもう五年越しの病氣なのであつた。それに、彼は法科の學生でありながら法律を少しも勉强したことがなく、それどころか殆ど法律書さへ買つたことがない位で、お門違ひの文學にばかり憂身をやつしてゐた。その代り友達も文學の方のそればかりで、文學に就いては文科の學生以上の知識を持つてゐて、その方の才能は決して彼等に劣るものではないと彼自身は信じてゐた。それが何故法科に籍をおいてゐるかと言ふと、彼の家は既に彼の亡くなつた父と共に財産といふものを持たなかつたので、止むを得ず彼は彼を後見し保護するところの親戚の意見に從つて、それで止むを得ず法科に入つてゐるのであつた。

さて、その法科大學の或年の暑中休暇のこと、――二方が壁で、他の二方も同じやうに壁なのであるが、たゞその前者の上部の方にだけ横に長い窓がついてゐて、後者の半間だけが扉になつてゐる、まるで箱のやうな小さな下宿の部屋の中で、毎日ごろ〳〵と寢たり起きたりしてゐた千吉郎は、讀書どころか、本當に病氣になりさうな暑さを堪へなければならなかつたのであつた。今言ふその二方の壁の上部についてゐる横に細長い窓の彼方には、隣家の或陸軍大將の庭のどす黑い木々の葉が、吹く風にきら〳〵と日光に反射しながら搖れてゐるのだが、その蒸風呂のやうな部屋の中に寢そべりながらそれを眺めてゐる彼の方には、少しも風が訪れないばかりか、感じられるのはそのきら〳〵する、いたづらに頭を苛つかせ身體を疲らせるに役立つところの、日光の反射ぐらゐな

ものであつた。起きてゐてもたら〳〵と油のやうな汗が、まるで蟲のやうに身體中を這ひまはるのだ、と言つて、寢てゐてもにじみ出すやうに身體中の毛孔からべと〳〵と膿のやうに汗が吹き出すのだ、昨日も今日も、さういふ日ばかりの八月の或日を、彼はたゞ芋蟲のやうにごろ〳〵しながら、金さへあればわざ〳〵避暑に行かなくても、それさへ持つて町に出れば、何とでも凌ぎがつくのだがナ……なぞと思ひながら、下宿の一間で唸つてゐたのであつた。

彼は退屈なまゝに、枕元から何とか雜誌を取り上げて、別に何を讀まうとするのでもなく、無責任に頁をくつてゐると、ふと『現代百名士の銷夏法』といふのが目についたので、それを又飛び飛びに拾讀してみると、甲名士は各々自分の好む仕事なり研究になり沒頭せよ、避暑に出かけるなどといふのは、却つて暑さを感じに行くやうなものだ、と說いてゐる。乙名士はそれには精神修養が何より肝腎で、例へば休暇を利用して參禪をするなどもいゝだらう、腹式呼吸などもいゝに違ひない、と言つてゐる。丙名士は抵抗療法とも言ふべき避暑法を自分はとつてゐる、と言ふのは日盛りの炎天に屋根に上つて、一時間ほど仰向きになつて焦げつくやうな日光を浴びて來る、そして自分の部屋に歸つて來ると、不斷は暑くて堪らないと思つたそこが水の中のやうに涼しく感じられる、と變つたことを述べてゐる。丁名士が言ふには、それは出來るだけ涼しい土地、輕井澤とか日光の山奧とかに出かけて行つて、風通しのいゝ部屋で、涼しい飲食をとる、出來れば部屋の中に氷の塊を絕やさずに積んでおくこと、と主張してゐる。いづれも皆いゝ方法だ、と法學生は思つた。だが、彼自身が雜誌記者なら、それ等は百名士の名前さへ借りて來れば、彼一人で考へ出せる方法でもあるのだ。そこで、やつぱりつまらない、と思つて、彼は雜誌を傍に投げ出した。

だが、よく考へて見ると、この法學生の問題は銷夏法なぞといふものではなかつたのであつた、彼のは單に夏だけのことではなくて、如何に春夏秋冬を過ごすべきか、といふことに違ひなかつた。籍を法科に置きながら、文學に憂き身をやつしてゐる彼のことであるから、文學こそ彼の好む仕事であり、研究である筈なのだが、目下彼にはそれがつまらなくて、退屈で堪らなくなつて來たのであつた。貧乏して、苦勞して、骨身を削る思をして、要するに泣き事や感想を文に綴つて、婦女子や又それ等に類似の人間どもの、蔭ながらの同情や賞讃を得たところが、一體それが何するものぞ、と彼は思ひ出したのである。そして、夏になつたればとて、涼しい土地に出かけて行つて、風通しのいゝ部屋で、涼しい飲食物をとるなどといふことは思ひも寄らない程の、貧しい報酬に甘んじて、それもよい、それもよいとして、さうして泣き事や感想の類を、なるべく巧みに、なるべく萬人の同感を誘ふやうに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文に綴つて活字にすることが、それが一體何程のことぞ、と彼は近頃考へ初めたのである。目も鼻も、さては顏も手足も、身體も何もない、空氣か靈魂かのやうな、ふは〳〵の影もないものなら兎に角、斯うして夏は暑さを感じ、冬は寒さを感じ、甘い物を食べたい口を持ち、美しい物を見たい目を持ち、良い物を着たい觸れたい四肢を持ちながら、言ひ換へると、それ等を有難い神樣から與へられながら、それ等を單に頭の一角を占領してゐるところの腦味噌の奴隷にせよとは誰が敎へた？　人間と生れて來たからには何か一つこの與へられた肉體を完全に利用して、と言つて筋肉勞働をして手足に無理な疲勞や不平を起させるやうな方法ではなく、生れる前は闇、死んだ後は闇、その間の僅な時間を、何か生き甲斐のあることをして見たいものだ、と法學生大下千吉郎は暑さに閉口しながら、寢たり起きたりごろ〳〵しながら、無論永久に實行されさうにない考へ方で、昨日も一昨日も、そして今日もぼんやり考へてゐたのであつた。

その時、女中が一枚の葉書を持つて來た。繪葉書で、差出人は波川珊子としてあつて、見ると、「今度こそ喜んで頂かねばならぬ時が來ました。それは私のために朝が來たのです。七日か八日頃に上京します。」と讀まれた。表をかへして見ると、繪葉書はその波川珊子が、何處かの洋館の扉を中から開けて、心持ち首を傾げて、嬌態を作つて立つてゐるところの寫眞である。何でも鄕國の京都で、彼女の保護者があつて、その男の斡旋で、小さな美術品屋をしてゐる、とこの前に手紙で大下に報告して來たことがあるから、大方その店の戸に立つて寫したものであらう。

初めて會つたのが、彼女の十六歲の時だつたから、と法學生は、丁度具體的に考へねばならぬ事が何一つなくて退屈してゐた時なので、繪葉書の寫眞を眺めながら、指折り數へて綿密に回想し始めた。早いものだ、して見ると、珊子ももう二十一歲になる筈だつた。――大下千吉郎が中學を卒業して、京都の高等學校に入つたばかりの時であつた、彼の中學校の同級者で、當時そこにある或私立の繪畫學校に通つてゐた、その名前を秋澤滿吉と呼ばれる男が、或時、「君、素敵な女を紹介しよう。僕は近頃、學校の外に狩野さんの塾に通つてゐるんだがね、そこへやつぱり繪を習ひに來る女なんだ、年は十六だがね、文學なども好きで、色んな本を讀んでゐるよ、ニイチエなども讀んでゐるよ。……」と話したことがあつた。

「美人かい？」と大下が聞くと、

「美人だねえ、」と秋澤は言下に答へた。「それが素敵にハイカラで、素敵に新しいんだ。兎に角、一遍會つて見給へ、今度の日曜に五條通のA――館で筑前琵琶の會があるんだ、そこへ彼女が行くから、君のこともう話してあるんだ、君、僕と一緒に行かないか、そこから一緒に何處かへ散步する約

束をしておいたから……」

そしてその豫定の日曜日に、初めて彼は秋澤の紹介で彼女に會つたのである。どうしてあれだけの分量の、多分澤山のかもじが入つてゐたに違ひない、髪の毛を支へてあるのか、と先づその點で見る人を驚かしたところの、現今では珍しくないが、當時はその琵琶會の席に來てゐた數多の女たちの誰にも見られなかつたばかりでなく、法學生大下が歩く範圍では決して目に觸れたことのない、髪の毛を頭の上にでなく、頭の後方の空間に盛り上げて、芝居でゞも容易に見られないやうな、小さな花束か王冠かとも思はれる、派手な櫛を挿して、十六歳の波川珊子は、開演後一時間ほど遲れて、見物席の中を割合に臆した色もなく、靜々と婦人席の一隅に向つて歩いて行くのを、法學生は初めて見たことであつた。彼等は、秋澤がそれより前に彼女を誘ひに行つた時は、これからまだお湯に入つて、そして支度をしてからといふ次第だつたので、別々に會場に行つて、そこを出てから行動を共にすることに約束しておいたのであつた。

「あれだよ、君、」と、つる〳〵に頭の禿げた、併し、立派な八字髭を生やした琵琶師が、高座で『石童丸』だつたかを演じてゐた最中に、入場して來た彼女の方を、みな一時に、琵琶を聞くことを止めて、その方に目を敬ててゐた群集の頭越しに、秋澤は頤をしやくつて彼女を指しながら、大下に向つて誇らかに言つた。だから、大下が初めて見た波川珊子はその横顔に依つてゞあつた。眉、目、鼻、口ともに、それ〴〵荒削りで、見る目にくつきりと映る上に、濃い髪の毛に對照して、多分に青色白粉を應用した化粧ぶりには、退屈の餘りその頃から女のさういふ事に就いて注意してゐた法學生を驚かせるに十分であつた。「なる程、これは秋澤の言ふ通り、素敵な女だわい、」と法學生は心の中で感心した。

「中々の美人だ！」だが、何事にも何物にも、第一印象ほど確なものはない、といふことを、彼が彼女に就いても、その後屢々思ひ當つたことがある。といふのは、美人だ、とその時彼の心の中で九割まで賞讃しながらも、確に一割位は「はて？」と再考させられたことである。例へば非常に美味な、且つ珍しい料理を味つて、珍味、珍味！　と賞讃しながら、何かその材料に一つ多少腐敗味のあるものでも混つてゐたとかして、珍味、珍味！　と二三度叫んでゐるうちに、初めの言葉の發音より最後の言葉の發音が、多少言ひ澁ることがある、それに似た感じであつた。

それから、多分夏のことだつたのと、天氣がよかつたのとで、琵琶會を中途で外して、彼等は、大下と秋澤とそして波川とは疏水に依つて近江の湖に出て、そこで夕方までボートを浮べて遊んだ。初對面の大下と波川とは、話の緒として、波川がニイチェを愛讀してゐると聞き及んだので、法學生は

それに就いて彼女と最初の言葉を交した。だが、相手も噂ほどにそれに通じてゐさうにないのと、大下その人も辛うじて『ツアラツストラ』一卷を卒讀した位の知識だつたので、早速ニイチエの話は切り上げてしまつた。漕ぐことと、唱ふことの好きな秋澤が、頻りに漕ぎ且つ唱つてゐる間に、ポツリ〳〵と他の二人はこんな言葉を交した。

「戀といふものをどうお考へになりますか？」と大下千吉郎は何と思つてか、多分相手のハイカラな、厚化粧した顔を見るともなしに見てゐるうちに、ふとそんなことを思ひついたのだらう、波川珊子に向つて尋ねた。

「私には戀といふものが分りません、」と彼女は斯う言つて、ちらと目を逸らして、少しばかりにつと笑顔をしてから、口をつまへて、すました顔をした。その時大下は、おや、この女、黑目勝の大きないゝ目だが、藪睨みだな、と氣がついたのである。それから口が少し大きいわい、と思つた。

「ぢやあ、あなたはまだ戀をなすつたことはありませんか？」と法學生は聞いて見た。

「えゝ、ありません。」

「では、これからですか？」

「いえ、私には、」と彼女は又藪睨みの目を見張つて言つた。「私には戀は出來ないのです、戀といふものが分りません、一生出來さうにありません。」

これ等の會話中に、大下千吉郎は相手の正面の顔と横向きの顔とが大分表情が違ふことを發見した。どういふ譯だらう、とそれが氣になつたので、相手の言葉などを考へてゐる暇がなかつた程、一層注意して彼女の顔を見てゐると、正面の方は相當に美人型だが、横向きになると、何處かゞ看過することが出來ない程、目觸りになると迄は分つたが、その何處かゞ中々分らないので、少し苛々する氣分さへ感じ出した。

「ぢやあ、あなたは男嫌ひですか？」と法學生は顔の探索の方に夢中になつて、言葉は殆ど無意識に口から出してゐた。

「それは、」と彼女は、相手に顔ばかり見詰められるのを左右に避けるやうにしながら言ふのである、そのために彼は益々彼女の顔立の吟味に困るのだつた。「それは、男にも好きな人と嫌ひな人とありますわ。」

「その好きな人に戀するといふやうな……」と言ひながら、法學生は心の中で初めて膝を打つて、さうだ、この女は鼻が高い、といふよりは少し大きい、殊に小鼻が大き過ぎるのだ、それに少々獅子鼻なんだな、と氣がついて、やつと安心して言葉をつゞけた。「……戀するといふやうな傾向になりませんかね？」

「好きなのと戀とは違ひますわ、」と彼女はきつぱり答へた。辻褄の合ふやうな、合はないやうな話ではあるが、その答へ方が餘りはつきりしてゐるのに彼は少なからず驚かされな

がら、尙も相手の顏を吟味してゐるうちに、この女は本當に十六歳なのか知ら？　その言葉つきから、顏立ちから、さういへば舞臺で着る役者の衣裳でもこれ以上に派手ではないその着物や、その厚化粧は、本當の年を隱すための化け道具ぢやないか、とさへ思はれ出した。化けるといへば、彼女は可成り妖怪味のある美人であつた。――

それから、彼と彼女とは大變仲がよくなつて、彼女も彼のところへ遊びに來るやうになり、彼も屢々彼女を訪問した。彼女は女ばかりの五人姉妹の末の妹で、彼女の家には中の一人を除いてもう婚期を十分に過ぎた姉たちがゐた。彼女のすぐ上の姉は、無論その前にも何人かの戀人があつたに違ひないが、當時は熊本の醫學校に在學中の戀人の卒業するまでと言つて家にゐるのださうである。その上の姉は三人目の養子にひどい目に遭つて、その上に捨てられたといふので、極度のヒステリイに陷つて、朝から晩まで一間に入つた切り、滅多に人に顏を見せない、といふやうな日を送つてゐた。そしてその上の姉だけが神戸の或商人に緣づいて行つてゐるだけで、一番上の姉は、市內の或商人の家に嫁入つてゐるのだが、始終夫と嫉妬の上の喧嘩をしたり、姑と仲違ひしたり、病氣になつたりして、一年のうちの十ケ月以上家に歸つてゐた。そして彼女等の父親は、あるにはあるのだが、妾をこしらへて、その家に行つたまゝ二ケ月に一度位しか歸つて來なかつた、だから憐れな彼女等の母親が、彼女等の身の上を案じながら、一緒に暮してゐるといふのだつた。

さて、大下千吉郎と珊子とは、仲がよくなつたとは言ふものゝ、唯うまが合つたと言ふ程度であつた。だんだんと附合つて見ると、一ケ月と經たぬうちに、彼女が、「戀といふものを知らない、」と言つたのは、それは單に言葉の上の遊戯で、別に具體的には聞かなかつたが、中々知らないどころの種類ではないことを、大下は知つたのである。無論、彼女もそれを隱してゐる譯ではないので、折に觸れ時につけて、それと察しられるやうな事を色々と彼に話したことであつた。が、大抵の場合、彼等は多く文學や哲學に就いて話し合つた、無論大下が多く語る役目で、終にはその方では彼女は彼にかぶれさへした程であつた。

そのうちに、彼女はいつとなく繪の稽古を止めてしまつた。

「文學をやつたらどうです？」と大下が勸めると、

「えゝ、やりたいと思つてるんですけど、」と彼女は答へた。

だが、別にそれを專門的にやり始めるといふこともなく、時とすると筑前琵琶に二三ケ月ほど熱中したり、かと思ふと、「もう何にもするのが厭になりました、」と大下に言つたことが屢々あつたり、要するに矢張りこれといふ事を何にもしないで、結局他所目に見たところに依ると、始終變らないのは化粧に憂き身をやつすことだけであつた。

大下が東京の大學に來てからも、彼等は月に一二度はたよりをし合つてゐた。それに依ると、彼女は女優にならうと考へたり、どうも女といふものは窮屈でいけない、色々な事情や境遇のために思ふやうにならないと嘆じたり、かと思ふと、先にも一寸言つたやうに、突然美術品屋を始めて見たり、容易に他から窺ひ知るべからざるものがあつた。——

さて、「私のために朝が來ました、」云々といふ彼女の葉書の文句であるが、それだけでは、それを讀んだ大下千吉郎には何の意味か、よくは解らなかつた。だが、何でも彼の所に來た彼女のこの一年來の手紙の中で、兩三度、「どうかして一切の束縛から免れたい、そして自分の思ふ道を進みたい、それには是非東京に行きたい、さういふ私の生活の、謂はゞ『朝』を一日も早く迎へたい、」といふ意味のことが認められてあつた。して見ると、今彼女が『朝』と書いたのもさういふ意味のことに違ひない、と法學生には直に察しられたが、さて東京に來てどういふことをしようといふのか、どういふ『朝』を迎へようとするのか？　それは彼には想像がつかなかつたし、又想像しようとも思はなかつた。とはいふものゝ、彼女のさういふのに對して、實は彼に多少の責任がないと言ふ譯には行かなかつたのである。といふのは五六年前に初めて彼女に會つた時以來、彼は若氣の至りで、（だが、その頃は、言ふこと、なすことに、どんなに張があつたらう！　とそれを思ひ出すと、僅な年月の距たりだが、今の退屈な生活や思想と比べて、愉快に違ひなかつた、と法學生は回顧するのだ。）人は自覺しなければいけない、殊に女は。そして古い因襲に囚はれてはならない、そんなものは一日も早く振り捨てゝ、新しい、自分自身の生活を始めなければならない、なぞと始終彼女に說いたものだつた。それが今、說かれた彼女には完全に感染して、燃え上つた形であるに引きかへ、說いた彼の方の火は消えて、一體そんな新生活とは名前ばかりで、あるかないのか、と摸索してゐる形なのだ。だが、由來、生活に於ては、男子より女子の方が、空想拔きで、常に足が地についてゐるものだ、使ふ言葉は同じでも、女子は男子と違つて、何事につけても肉體的で、實際的であるといふことを、法學生は氣がつかなかつたのである。

しかし、彼は前にも言つたやうに、退屈で困つてゐた時のことだから、そんな理窟や思案は一瞬のうちに振り拂つてしまつて、葉書の中の「七日か八日」といふのは昨日今日のことである、早くやつて來ればいゝな、早くやつて來れば、と久しぶりで、ひどく心の勇むのを覺えて、「銷夏法、銷夏法！」と心の中で叫んだ。

そのうちに、彼は又いつかうと〳〵と、眠つたつて定つて不快な夢に惱され勝なのだが、他所目には他愛なく、寢入つてしまつたのである。

二

それから數日後の午後、大下千吉郎は、待つともなく待つてゐた彼女からの次の葉書を受取つた。文面は「やつて來ました、いらつしやいまし、一先づ此處に落ち着きましたから、」と極めて簡單に、寧ろ彼には冷淡に見えた程に、認めてあつて、駿河臺の相當な旅館が差出し處になつてゐた。

それは受取つた者をして餘り勇んで尋ねさせるやうな葉書ではなかつたが、例に依つて例のやうな日を送つてゐた法學生は、その可成り神經質な性質にも拘らず、誰をおいても、彼のところへはこんな葉書どころか、先づ彼女自身で訪問して來なければならぬ筈だ、と彼は一寸いま〳〵しく考へないではなかつたが、よく〳〵無聊に苦んでゐたと見えて、早速電話帳をくつて彼女の旅館の番號を見出し、それに依つてわざと、これから訪問しても差支へないか、と問合せてから出かけて行つた。それでも、彼はまだ心の中で、一年前に會つたまゝの彼女を想像して、これから旅館の一室で、落ち着いてゆる〳〵と、彼の刺戟が原因となつたところの、彼女の所謂『朝』に就いて、彼女から妹らしい相談をかけられることの快さを豫想しながら、いそ〳〵と彼女の旅館の玄關に立つたのであつたが、取次の女中に、「唯今お湯をお召しになつていらつしやいますから、どうぞこちらで暫くお待ちを……」と言はれて、その時もまだ彼女の派手な衣裳や、女らしい色々な持物で、繪具箱のやうに散らかつてゐる、艶めかしい部屋を見ることを快く考へながら、案内の女中の後からついて行つた時、ふと通りすがりに目についた、少なくとも十二疊以上の開け放した大部屋の中に、まるで何かの會でも始まつてゐるかと思はれる程、大勢の人々が車座になつて雜談してゐるのを見たが、その人たちの大部分が、髮の毛を長く伸ばしたのや、天鵞絨の服を着て大きなネクタイを派手に結んだのや、一見して所謂藝術青年の寄合であると感じると共に、直覺的に彼等が悉く波川珊子の訪問客であると氣がついたので、大變なところへ飛込んだ！　と急に後悔されたが、「どうぞこちらで暫く……」と女中に促されて、往來に面した六疊の、明らかに今迄人氣のなかつた部屋に通されてしまつて、叩きのめされた程がつかりしてしまつた。だが、今更しやうがないので、狐にでも憑かれたやうに、ぽかんとして、立てつゞけに煙草ばかり吹かして見たが、それが又彼が懷にあつた煙草をすつかり喫ひ終る時分になつても、彼女は中々現れなかつたものであつた。

いつそのこと、このまゝ無斷で歸つてしまはうか、と三四度も考へてゐた時、漸く彼女が愛嬌笑を浮べながら部屋に入つて來た。昔ながらの厚化粧で、一口に言ふと白粉と紅と香

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com